

# 北越雪譜

## 二編春

和書門	
三六五二六號	類
一二二函	架
一冊	冊
七	冊

庫文閣内	
三七五三三號	和書類
五七冊	架
五	冊
五	冊

庫文閣内	
番號	和 36526
冊數	7 ( 4 )
函號	175 78





北越雪譜 二編 四卷

越後 鈴木牧之編撰 天保辛丑新刻

京山人百樹增修 書肆 文溪堂

江戸 京水百鶴畫圖 發販

北越雪譜二編叙

北越雪譜六卷越後塩澤鈴木牧之先人

雪窗園炫寒燠隱几隨筆其事出實脚

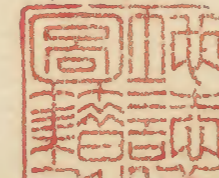
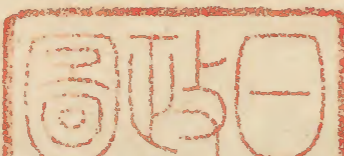
徒非構空架虛之談然翁固不必期於梓行矣

嚮者郵筒懇乞校正者之艾刈英蔓據擷菁

英先輯之卷以為初編告約使書肆文溪堂刊布

之於後越音之奇予彙為狀供即遊資錦室

婦妾市宅妻婢以詳知越雪解士通人或云



雪譜二編

三十一



格致之一助爰以雪譜之名頗踴躍於是乎書  
 埒類乞嗣撰蓋以知在之殊稿在也余謂不踏越地  
 不可說越事仍丁酉之夏推乃見京水越遊救  
 十日有紀行作再採數條刪補少弱之殊稿以爲二  
 編稿定將置序言有頃者晚暮連日放晴紅酣  
 綠戰花神旺壯遊心勃興欲詣賽成田山感怒王祠  
 以療錐毛之痲矣夫成田山香火之盛世々所知也凡  
 自江戸到成田者抵小細街橋岸一買搭船水路直

往行德都人皆以爲捷徑蓋行德一市會也不必成  
 田香火者搭船常盡列于橋岸待行客是以俗呼  
 茲岸云行德河岸呼之爲船云行德船余亦隨此  
 搭船其所供載者多是庸男雜沓穢衆口味  
 嘈余傍在一僧一士一商僧年齒六十許徒一童偈  
 士可二十四五誇嘗輕俊殆似學究商半老博博  
 市樣相俣接膝余籍默不敢出一語凡屋漸去  
 芽草櫻杏浮雪嫩柳吐烟村落春景百逞如畫



頗水行之會心也。船既過，舟途庸卑多，就賦  
 嘈々自羅寒之可悅。壯士出墨斗，持懷楮，覓白果  
 是書生也。老僧以鑿楚鏡，披書士，閣筆曰：尊者所  
 執是何書？僧曰：北越靈譜。士曰：僕嘗讀之，先固冊子  
 何足比閱？僧曰：貧乞一錫，吾干北親，知越靈，故特購之。  
 供以續矣。今閱京山人序，彼少識字乎？士曰：否。我  
 夫京山者，文場之奴隸，藝苑之僮僕也。近年隨落  
 子，碑史院本之泥中，汚塗姓名，遂不能脫其窠窟。

強然彼自者，李漁金人瑞之流，亞文家爭許  
 之。年僧哈然笑而不應。余佯睡，以之高已，得曰：鄙人  
 書賈也。能識刊行之趣，凡上梓之書，不論編輯之荒  
 誕，與詞章之奇雋，只以多璫為大著述。奉其作  
 者，為搖鈴討材翁，強感服。顏士抄書，若其不吝，唾  
 而不顧，是書梓之通義。曹耦之常態也。北越靈譜  
 初編之梓，一舉數七百餘部，刷板裝本，至不暇給。  
 故二編刻，散免，豈有近矣？士不然，其言猶在不止。



數甯頻鼓傳手釋卷曰論說姑置足下遂京山  
 年否士曰不識僧曰我十年前與彼會於一精  
 舍僅得一面識不為無母緣言畢遽然拍余背  
 曰京山老人醒眠長兄忘我致余堪然不得應時  
 船者行懷之岸舟中之人皆上岸不得繫叨吐欵  
 于茲矣此夕縱其言於逆旅燈下以爲序云

天保十一年庚子潔月

京山人有樹并書



北越雪譜二編凡例

此書全部六卷收之老人之眠を驅の漫筆梓を俟ざるの稿本あり故小走  
 墨亂寫一圖も亦拙画あり老人余小示して校訂を乞ふ因て其駁  
 雜を刪り校訂清書一圖ハ豚見京水小画一ツの三卷書賈の  
 請小應じ老人小告て梓を許し以せ小布一發販一奉して七百餘部を  
 鬻り是小依て書肆後編を乞ふ然ども余が机止宅の編筆小忙々屢稿を脱る  
 の期約を失ひ由是近目務之老人稿本の殘冊を訂し以其乞小授く  
 牧之老人ハ越後の聞人あり嘗貞女村實を以聞之屢縣監の廢賞を拜して氏  
 の國稱を許し生計の餘暇風雅を以四方小交る余が亡兄醒來別号翁の鴻書の  
 友あり由是余も亦是小嗣ハ老人余小越遊を樂しと年々あり余固山水小耽の  
 癖あり由是小遊心勅くたゞも事小勿て果さむ丁酉の晩夏遂小豚見京水を從く  
 啓行は始り越後の諸勝を足さんと思ひが越地小一後年稍侵して穀價貴踊



人心種ありきゆゑ小越地を踐こと僅小十ぐありきりきりとも旅中小於て耳  
目を新小せし事を奉て此書小増修も百樹曰といふの是也

前編小載する三國嶺の圖ハ牧之老人が草画小倣て京山私儲満山小松樹を  
画り余越遊の時三國嶺を踰し小此嶺ハさうあり前後の連岳をま松を

見む此地小さうも越後ハ松の少き國あり三國嶺を知り人ハ松を画しを笑ふ  
也一是老人が本編の誤あやまり非む京水ハ蛇足あり

山川村庄ハさうあり凡物の名の訓ト清濁小より越後の里言ハたゞいさるも  
あづり然とも里言ハ多く以訛あり今姑俗小从りあり本編ハ音訓の假名を

下さむかあづけハ余が所為あり謬を本編小驅こと勿き  
余也固浅学小て多く書よ不讀寒家小て書小不富少く藏せり屢しばしば祝融小

奪とて架上蕭然さうぜんなり依之増修の説小於て此事ハ彼書不見とおぼ覺も其書  
を藏せり急就の用小弁せり職つと痒かゆまらふ多し且浅学ハ引編

いさるも最まらるる也

本編雪の外わ他の事を載するハ雪譜の名を穿うす小似にともども姑記して好事の  
話はなし柄小具を増修の説も亦然り

雪の奇状奇事其大槩ハ初編小出せり猶軼事有を以此二編小記し己小初編小  
載するも事の異ことハ不舎して之を録とり本ハ流傳の廣きゆゑ初編を

讀よむ者ものの為小さるの意あり前後を讀人其層見重出を詰とめて勿なし  
釋しやの字釈小作の外澤を沢驛えきを馭つり俗ぞうありさうも巻中驛澤の字は

姑俗小从りて馭つり馭つり以梓し繫けいを省す餘の省字ハ皆古法小从り  
卷中の画老人くわ稿本こうの竹画たけを真ま或ハ京水ハ越地小写し真景ま或里人りの話を

聞きく圖ず小作りしりあり其地小照して誤あやまりを責せまむことありき  
老人編を嗣つの意ありゆゑ小初編二編との前編後編といふこと

天保十一年庚子仲春

京山人百樹識



一之卷目録

越後の城下

古晉あゝ旧蹟

雪の元日

雪の正月

玉栗。羽子權

雪吹小焼飯を賣

雪中の戯場

家内の氷柱

雪中の用具

輜の説

寒氣の力

シガ

夏の雪

削氷

雪の多少

浦佐の堂叅

通計十六條

北越雪譜二編 卷一

卷之一

越後塩澤 鈴木牧之編撰  
江戸 京山人百樹増修

○越後の城下

越後の國往古ハ出羽越中ノ距リ一事國史小見ゆ今ハ七郡を以テ

一國トモテ東小岩船郡古く石小作 蒲原郡新寫の邊此郡小屬す 西小魚沼郡海小

北小三嶋郡海小 刈羽郡海小 南小頸城郡海小近き 古志郡海小 以上七郡也

城下ハ岩船郡小村上内藤侯 蒲原郡小柴田溝口侯 黒川柳沢侯 三日市

柳沢彈正侯 三嶋郡小与板井伊侯 刈羽郡小推谷堀侯 古志郡小長岡牧野

一万石陣營 頸城郡小高田神一保侯 糸魚川松平日向侯 以上城下の外頗豊饒を為

七方四千石 頸城郡小高田十五万石 糸魚川二万石陣營 以上城下の外頗豊饒を為

を処魚沼郡小小千谷古志郡小三條三嶋郡小寺泊。出雲崎刈羽郡小

柏崎頸城郡小今町あり 蒲原郡の新寫ハ北海第一の渚ありバ福地たり



夏論を俟て此餘の豊境ハ姑畧を此地皆十月より雪降るその深と  
浅とハ地勢小よる猶末小論せり

○古哥あゝ旧蹟

蒲原郡の伊弥彦山作夜伊弥彦社を當國第一の古跡とて祭るところの  
御神ハ饒速日命の御子天香語山命あり 元明天皇の和銅二年の垂  
跡とて社領此山さの高山ゆもあゝささども越後の海濱八十里の中やふ  
独立しん山脉の山つづら右小國上山左小角田山を提攜して一  
国の諸山是小對して拱揖する如くつづら山より見えて實小越後の  
鎮ともあゝさ山は是よりやあゝとちりるささども命もさ小垂  
跡ましくさ此御神の縁起或ハ灵驗神宝の類記をささまあまこ  
とご姑さ小省○さて此山をよささる古哥小万葉「や日子のまの神さび  
青雲のなまびく日ささ小雨をやささ人」又家持小「や彦の神のま

小けりもかのこやまをんかまのまきさつぬつらさる」▲長濱 頸城郡小  
在り三島郡とも家持の哥小「ゆささ雁のつぎを休むてふこさや名小  
あふ浦の長濱」▲名立 同郡西濱小あり今ハ宿の名小よふ 順徳院の  
御製小兼久のまよさ佐渡「都をささささささ出ハ今宵ももう身名立の  
月を見さ哉」▲直江津 今の高田の海濱をいハ同御製小「あけバ  
聞きけバ都のこひさ小此里をささ山やさささ」▲越の湖 蒲原郡小  
とよふ処多し里言小湖を湾とふその大さを福嶋湾とハ四方三里計  
此湾小遠くびく五月兩山あり貫之の哥小「潮のや越の湖近けさ恰  
もまこあさま小り」又俊成卿小「恨てさあささせんあをさのさ越の湖  
ささめあけさバ」又為兼卿「年をへつり越の湖ハ五月兩山の森の岸さ  
▲柿崎 頸城郡小 親鸞聖人の詠玉ハ「ささ口碑小傳」ハ哥小「柿崎小  
ささく宿をささ小主の心ささささささ」按さ小聖人御名を



善信と申す三十五歳の時諺口小係りて越後小瀧さる時小承元元年二月あり後五年を経て勅免ありてとも法を弘ん為とて越後小のまじしこと五年あり故小聖人の旧跡越地小残まり弘法廿五年御歳六十の時洛小飯玉あり越後小五年下野小三年常陸小十年相模小七年弘長二年十一月廿八日遷化壽九十歳件の柿崎の哥も弘法行脚の時の作ありて

此外▲有明の浦▲岩手の浦▲勢波の渡▲井栗の森▲越の松原のとも古哥ありとも他國のちちり名所ありてたうふ越後ともまじりて

さて今を去夏天保十一年五百四十一年前永仁六年戌のち藤原為兼卿佐渡左遷の時三嶋郡寺泊の駅小順風を待玉ひ間初君との遊女をゆ玉ひ小初君が哥小ののちひり路の浦の白浪も立ちてありひあり

ととまきけ此哥吉瑞とありてや五年たちてのち嘉元元年為兼卿飯洛ありて九年の後正和元年玉葉集を撰の時初君が件の哥を入

とらと玉あり是を越後第一の逸事とて初君が古跡今寺泊小在り里俗初君屋敷との貞享元年叔門万元記との初君が哥の碑ありしが断破しを享和年間里人重修して今小存せり

○雪の元日

凡日本国中ふ於て第一雪の深き国は越後ありと古昔も今も人の事ありありとも越後小於も最雪のちきこと一文二文小わづら我往魚沼郡あり次小古志郡次小頸城郡あり其餘の四郡ハ雪のつり夏三郡小比をさ浅し是を以論をさ我往魚沼郡ハ日本第一小雪の深降所あり我その魚沼郡の塩沢小生と毎年十月の頃より翌年の三四月のちち心雪を視事已小六十余年近日此雪譜を作ると雪小麓居のまじりあり。さて我塩沢ハ江戸を去こと僅小五十五里あり直道を量ハるや近うづり雪のち時ち小健足の人ハ四日ありハ江戸小



江戸の元日を聞かぬ借神朱門の更ハあつて市中八千門  
 万戸千歳の松をかざり直つる 御代の竹をたて太平の七五三を引こ  
 ろふ新年の賀客麻上下の肩をつつ往來をす小万歳もうら  
 まドヤの女太夫と鳥追ひの三味線小めぐる兄哥をうらひ娘の児の  
 やり羽子男の児の糸鷲見さの聞のめをたさうふ初日影花や  
 小き一昇とる實小新玉の春こそつべいと其元日も此雪国の元日も  
 同元日あつても大都會の繁花と邊鄙の雪中と光景の替り事  
 雲泥のちがひあり ○そもく我里の元日只野も山も田圃も里も平一  
 面の雪小埋り春を知つて庭前の梅柳の類も去年雪の降がる秋の末  
 小雪を厭ふ丸太と立く繩縛小過さる雪の中小ありと元日の春  
 をあつてささる人も三四月小つてささる梅花を不見翁が向ふ 春も  
 稍景色とつての八月と梅と冷ぜりの大都會の正月十五日ありま

山里の万歳邊一梅の花と邊鄙の三月あるア門松の雪の中一建  
 七五三とつての雪の軒小引とつての禮者ハ木履ををき從者ハ藁靴あり  
 雪徑小階級あつて所小いささる王人もささる小をたさる此げとつてのハ  
 礼者小ささる人皆ささる雪全く消了夏のそとめ小いささる草  
 履をささる事ありとささる元日の初日影も惟雪の銀世界を照をの  
 一つとつて春の景色を不見古哥小「花をのり待らん人ハ山里の雪間の  
 草の春を見をささる」とつて雪浅き都の事ささる雪国の人ハ春小  
 春をささるをのりつて生涯を終つてをささる繁榮豊腴の大都會  
 小住とつて年々歳々梅柳煥色の春を樂む事實小天幸の人とつてア  
 ○雪の正月  
 初編小つて如く我國の雪ハ鷲毛をささる稀あり大くハ白砂を降を  
 如く冬の雪ハささる小凝凍とささる春小いささること鉄石のごと

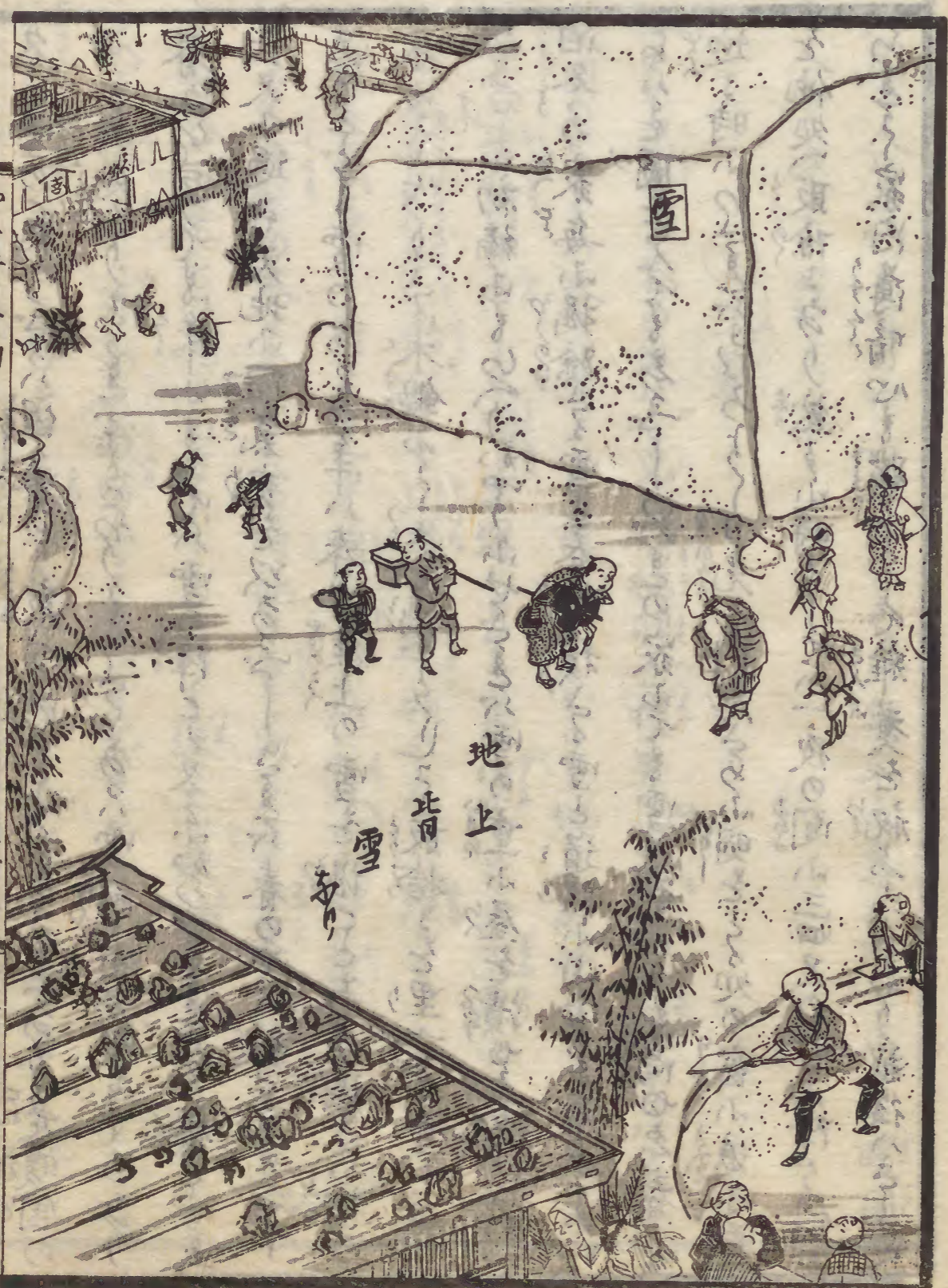


行 驛中の正月積雪の圖



雪譜二編卷之一

六海堂



地上  
皆  
雪

雪譜二編卷之一

五

文樂堂



冬の雪のこりこりさるるハ温氣あり乾る沙のごとくあるゆゑあり是暖国の  
 雪小異処ありさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 春ふりつりても年小ゆりてハ雪の降こと冬ふかりつりても積こと五  
 六尺小過を天地小阳氣有を以てさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 木ゆく作りさる木鋤ゆく土を掘ゆくさる取捨るを里言ふ雪を掘と  
 いふ已小初編あもりりかやふせさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 旧冬の家毎小掘除る雪と春降積る雪と道路小山をさるること下小の  
 ららるる圖をえりてさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 迎る時ふりさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
 を他処へ取除るあり然る時とて一夜の間小三四尺の雪小降るあり  
 らるる家内薄暗心も朦々として雑糞を祝ふあり越後ハさるる

北国の人ハさるる雪の中小正月をさるるハ毎年の事ハかゝる正月ハ暖国  
 の人ハさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる

○玉粟

江戸の見曹ガ春の遊ハ女見ハ備球羽子擢男見ハ紙鴉を揚さるるハ  
 我國のごともハ春ふりてハ前ふりてさるる地とて雪ありさるる如  
 けさるる歩行小苦々路上小遊をさるる事少々ハ玉粟とハ見戲  
 あり春中ハさるるさるるさるる始ハ雪をすちり成なるる雜卵ざいりのお大おささ小こ握にぎりりてて其その上うへへ  
 と雪を幾度もさるる足先踏堅あもりハ柱小あてて壓堅ことを肥と  
 いふさるる手毬てまりのお大おささ小こありさるる時他の童ガ作りさるる玉粟を庇下るる小置  
 一ハ我ガ玉粟を以他の玉粟ふららあつる強き玉粟弱き玉粟を碎くを  
 りつる勝負を争ふ此戲所小よりん。コボウノコマ。地独樂。雪玉の里  
あまのり小雪をさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる  
さるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるるさるる







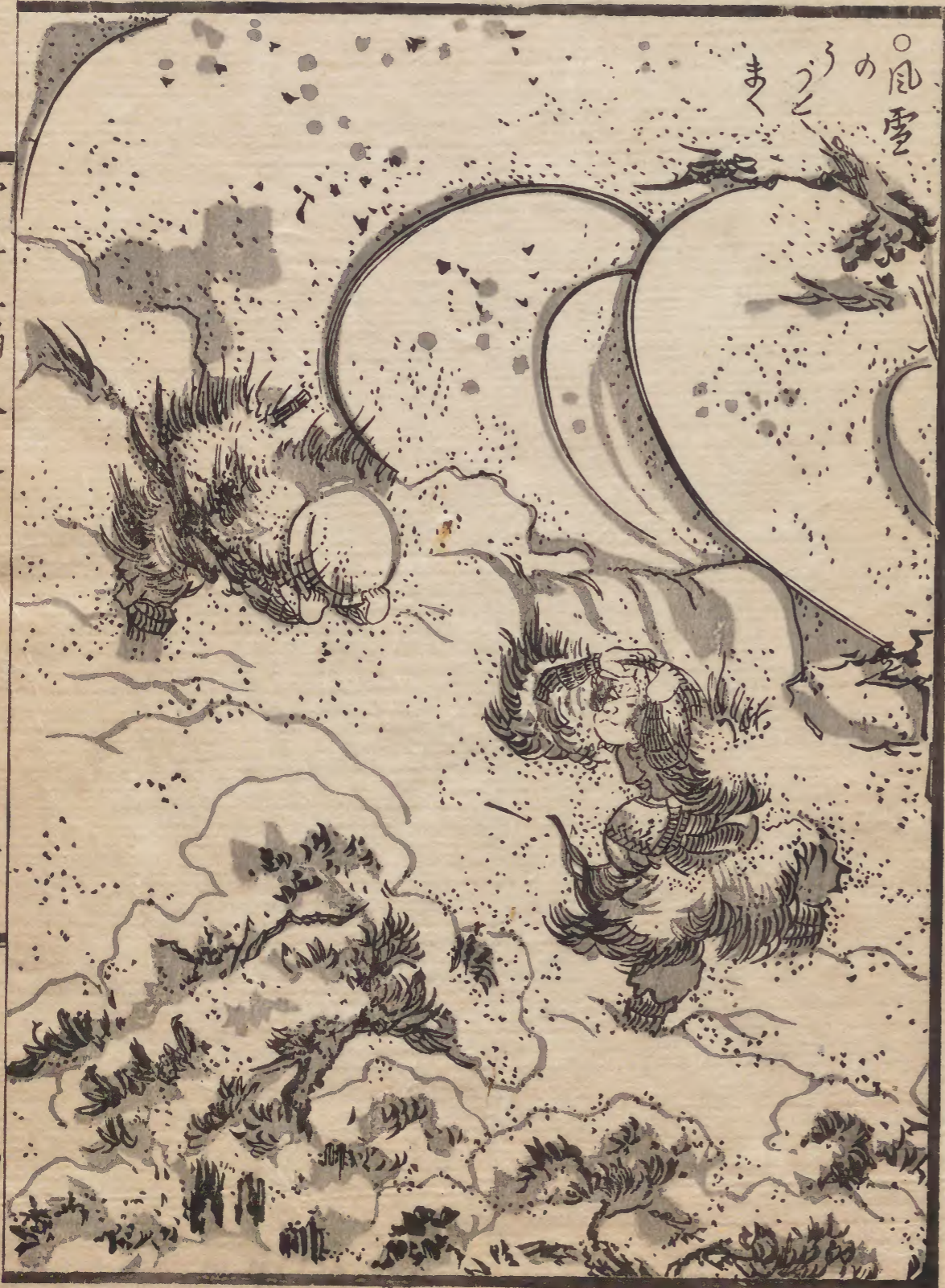
塚山嶺雪吹圖



三譜二編卷之十一

文海堂藏

○風雪のま



三譜二編卷之十一

八

文海堂藏







まま〜甚〜橋を穿ゆ道避く日も已小暮あんとき此時小い  
 うり〜焼飯を賣るる農夫ハ肚減て勞と商人ハ焼飯小腸満足をを  
 め〜往農夫ハ屢後るゆ急終ハ棄て独先の村小い〜の家の小  
 入り〜炉辺小身を温〜酒を酌始〜蘇生〜をひ〜けり  
 〇さて志〜〜あり〜と呼声遠〜聞るを家内の者き〜つけ  
 あ〜雪吹倒〜と助けよ〜近隣の人を  
 よび集め手毎小木鋤を持〜木鋤を持ハ雪小埋りし雪吹た〜雪國の常〜ま行〜か  
 わり〜大勢のみの一人の死骸を家の土間(昇入〜)をらの商人も立寄  
 見えハ最前焼飯を賣るる農夫ありし〜とをあの芋徳商人或時余が  
 俳友の家小返雷の話小件の事を語り出〜彼時我六百の錢を惜  
 焼飯を買もんバ雪吹の中小餓死せん〜の農夫が如〜今  
 日の命も錢六百のうちあり〜と笑ひ〜俳友が語り

○雪中の戯場

五穀豊熟〜羊の貢も心易く捧げ諸民鼓腹の春小遇〜時  
 氏神の祭あど小遭〜を幸小地芝居を興行する度あり役者ハ皆  
 其処の素人あ〜ハ近村近取より來るあり師匠ハ田舎芝居の  
 役者を傭ふ始小寺あ〜群居〜狂言をさ〜のちを〜の  
 役を定む此群居の議論紛〜と〜一度ゆ〜果〜さ〜事定  
 り〜のち寺小於〜替古を〜む技熟〜のち初日をさ〜衣裳艶  
 のる〜是を借を一ツの業とさ〜のあり〜物の不足〜此芝居  
 二三月の頃さる事あり此時ハ〜雪の消ぎる銀世界ありさ〜  
 芝居を造る処此役者等が家ハさ〜あり親類縁者朋友より人を  
 出〜あ〜人を傭ひ芝居小屋場の地所の雪を平ら〜踏か〜  
 舞臺花道樂屋棧敷のる〜皆雪をあ〜その形〜



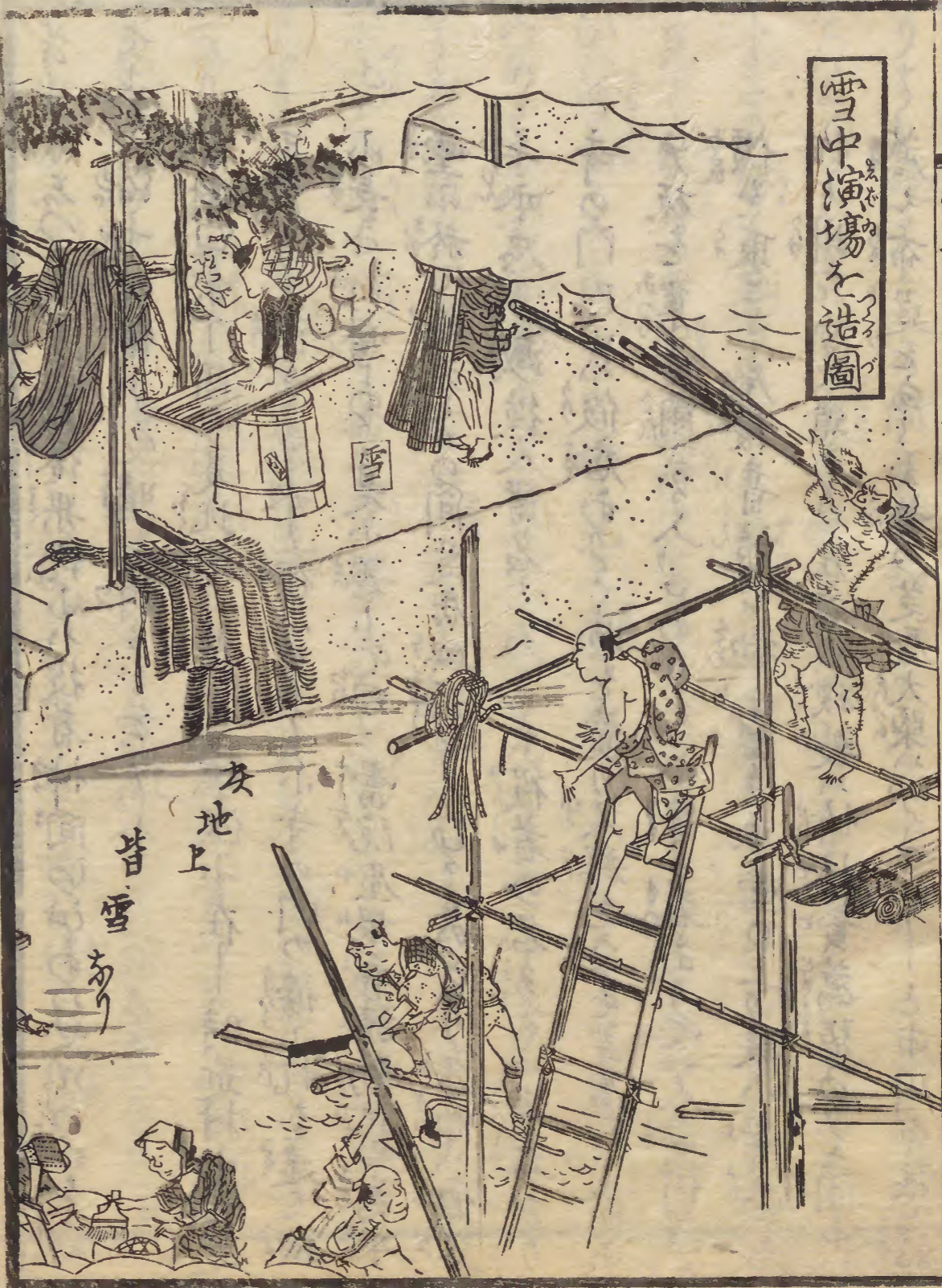
ありよく造ること下の圖を見て知るべし此雪少く造りたる物天又人  
 工をたぎけて一夜の間小凍く鉄石の如く小なるものゝ如く大入りも  
 さゞきの崩るゝ氣づひひり一弥生の頃ハ雪もや稀るゝ春色の空  
 を見ると家毎小雪圍を取除くところあるは処より雪かといひの丸太の  
 るハ雪垂とく茅少く幅八九尺廣き二間をよりふつりたる簾を借  
 あつりてきてての日覆とるをがら花とらハ雪少く作りたる上小板を  
 あつりたる此板も一夜のうちに小氷つきと釘付小あつりより堅く暖  
 国小比と論の外あり物を賣茶屋をも作りしつゝの処も平一面の  
 雪のまぶ物を煮処ハ雪を窪め糠をちりて火を焼ハ雪の解さる事  
 妙ありのまて戯場の造作成就しても春の雪ありつゝと連日晴を  
 見む興行の初日のびる時ハ役者ふありたる家ハさうと此をわを見ん  
 とく諸方小逗留の客多く毎日空をあらめて晴を待つゝ客のゆ

あつてもあつて始倦果終ハ役者仲間いひあつて川の氷を砕  
 て水を浴干垢離して晴を祈るもをり

百樹曰余丁酉の夏北越小遊びて塩沢小在一時近村小地芝  
 居ありと聞て京水と俱小至りて小寺の門の傍小杭を建て横  
 小長き行燈あり是小題して曰當院屋根普請勸化の為本  
 堂小於て晴天七日の間芝居興行せしむるものあり名題ハ假名  
 手本忠臣藏役人替名とありて役者の名多くハ寢名あり  
 寺の門内小假店ありて物を賣り人群をあらを芝居小假小  
 戸板を集りて圍る入り口ありて小守る者ありて一人前何れと  
 價を取ると屋根普請の勸化り本堂の上り段小舞臺を  
 作り掛左小花道あり左右の棧敷ハ竹林簀薦張あり土間ハ  
 薦を布筵をあらが旅の芝居大槩ハかくの如くと市川白猿が話



雪中演場を造る圖



及地上  
皆雪あり

雪国に椽  
桐あり  
画者不  
知し  
系りけり

寺





小もきうぬ 棧敷のうか 一欲然やうの毛氈をうけらるる小彩色  
 画の屏風をたてしけののをさあり四五人の婦も綿帽子さるる  
 邊鄙小古風を失ざる観人群をりて大入ある猿の如き童ども樹  
 小のりてさるるあり小娘が笊を提す氷とよび土間の中を賣る  
 笊のあり木の青葉をさき雪の氷の塊をうる茶を賣つぎを氷  
 を賣るる甚めぐじ氷のこと削氷の條ふらふらさるる口上りひ  
 出さ寺へ寄進の物ありは役者へ贈物餅酒のふ一人の名を  
 奉品を呼ぶ披露一此処忠臣藏七段目をさまりとらひ幕開  
 ちかふ小折し岩井玉之丞とと田舎芝居の戯子あり一頗る美  
 あり由良の助小折し余が旅中文雅を以識人あり年若あれは  
 かる戯をもろをさるる常ありりり今之坂東彦三郎小似  
 たり技も又観不足り寺岡平右門小ありハ余が客舎小きて頭

ありこまも常小かをりて関三十郎小似て音声もま天然と関三の  
 如し余京水と相顧て感し京水ならも小イヨ尾張屋と誉けり尾  
 張屋ハ関三の家号ある事通トごまや尾張屋とやむるものひりも  
 あり一幕やうとせし小守る者木戸をゆるぎを便所ハ寺の後小  
 あり空腹あつた弁當を買玉取次やさんとつ我のふあつた人  
 又いさびぢぢぢの小人散ハ演場の蕭然を厭ふあつた  
 出所あつたと尋し此寺の四方垣をめぐりし出へるの際し折  
 る童が外より垣をやぶりて入りしその穴より西入るりぢ  
 こまも又可笑しつてぞありし

○家内の氷柱  
 旧冬より降積るる雪家の棟より高く春小ありても家内薄暗  
 める高窓を埋るる雪を掘のけり明をとるる前小ありし如し此



屋上の雪ハ冬のうらちをく掘のつる度々小木鋤ひきたりは屋  
 上を損むる変あり我國の屋上おやく板葺あり屋根板ハ他国  
 小比は厚く廣く葺上る小葺木といふ物を作り添石を置くと  
 鎮と風を防の便とせよめあふ雪をわりのつるといふもはくを  
 ことあるとそその雪のうへ早春の雪ありつりて凍ゆえ屋根の中  
 水をあふび春も稍深まる雪も日あつて解あふハ焼火の所雪早  
 く解ふふいふかの屋根の損下る処木羽の下をくりぬじて  
 雪水漏ゆえ夜中徹小畳をとりけ桶鉢のつるあつてをあふ  
 て漏をうらるる処を修治とせよ小雪全くまききゆえ手をく  
 変あふと漏ハ次第小てり座敷の内ふくまらも大なる氷柱を  
 見ると時あり是暖国の人もふせくぞおつる

百樹曰余越遊して大家の造りやを見ふ小楹の太く江戸の

土藏のこと天井高く欄間大ありと雪の時明をとる  
 とあり戸障子骨太く手丈夫ありゆえ國鴨柄も廣く  
 厚くまき大材を用事目を駛せりと皆雪小漬ぎの  
 用心ありとぞ江戸の町ふ小店下を越後小雁木雁木の  
 下廣く小荷駄をも率へきやありと雪中小の庇  
 下を往來の為あり余越後より江戸へ飯時高田の城下を通  
 ぐらハ北越第一の市會あり高工軒をめぐり百物備さるる  
 みの兩側一里余庇下つきつるその中を往こと甚意快ありき  
 文墨の雅人も多くとき旅中羊の凶さる小遭飯家を急  
 ゆえ刺を入とせりハ今小遺憾とせ

○雪中歩行の用具

雪中歩行の具初編小其圖を出し製作を記さざらび

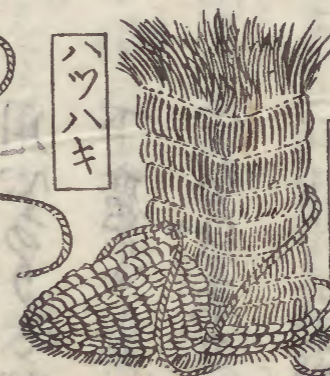


その詳をを示す

藁沓



深沓



ハツハキ

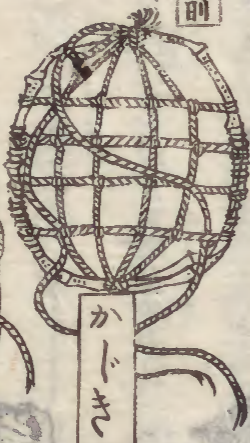


○藁沓はたけの草をわらわの草とよめつものこを丸けく  
あまの草をわらわの草をほき二動かすけおろす。をわらわ  
草の中をあまの草とよめつものこを丸けく。をわらわの草を  
わらわの草とよめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草と  
よめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこ  
を丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこを丸けく。

○深沓はわらわの草をわらわの草とよめつものこを丸けく  
あまの草をわらわの草をほき二動かすけおろす。をわらわの草  
の中をあまの草とよめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草と  
よめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこ  
を丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこを丸けく。

○ハツハキはわらわの草をわらわの草とよめつものこを丸けく  
あまの草をわらわの草をほき二動かすけおろす。をわらわの草  
の中をあまの草とよめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草と  
よめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこ  
を丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこを丸けく。

むねあて



○シナ皮とて深山小あつ木の皮を削り作り寸尺ハ身小應  
作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應  
作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應  
作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應  
作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應

○シブガラはわらわの草をわらわの草とよめつものこを丸けく  
あまの草をわらわの草をほき二動かすけおろす。をわらわの草  
の中をあまの草とよめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草と  
よめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこ  
を丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこを丸けく。

○うんぎは古訓あり里俗がきとりのたて一尺二三寸  
よと七寸五六分形圖の如くシヤガラとよめつものこを丸けく。をわらわの草  
の中をあまの草とよめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草と  
よめつものこを丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこ  
を丸けく。をわらわの草をわらわの草とよめつものこを丸けく。

○せうりハたて二尺五六寸より三尺余横一尺三寸山行  
をたてたて作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應  
作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應  
作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應  
作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應作り寸尺ハ身小應



右の外男女の雪帽子雪下駄其餘種々雪中歩用の具あまごも薄  
雪の国小用多物小似うはる小省く



百樹曰余  
北越小遊びて  
牧之老人が家小  
在し時老人  
家僕小命し雪を漕  
形状を見せし京水傍小  
ありて此圖を写り穿物ハ  
機。縫あり戲小穿てし  
一歩も進てあはる家僕があめは馬を御するごとく

二 輶

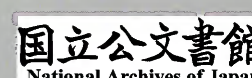
輶 字景 禹王水を治し時載る物四ツあり水舟陸舟車泥舟  
輶 山舟標 註書徑 志るは此輶といふもの唐土の上古よりありぞり  
彼ハ泥行の用るる雪中小用多とハ製作異るる輶の字異  
○菟。棧。秧馬 諸書小散見を或ハ雪車。雪舟の字を用るる俗  
用あり

そもく此輶といふ物雪国第一の用具人力を助事船と車小同く  
且小作事最易きハ圖を見て知るア堀川百首兼昌の哥小  
初深雪降ふけけけあはるち山越の旅人輶小のまてこの哥を  
イハ我國小そりをつるの古をまへト前もあをくつるごとく  
我國の雪冬ハ凍さるめ冬冬小輶をつるハ雪小ちらりつる輶と  
らハ輶ハ春の雪鉄石のごとく凍る正三三月の間小用ふべきもの



其時小いりを里俗輜道小ありと云ふ三月の間に... 俳諧の季寄小雪車を冬と云ふは詠まのさきとて雪中の物あり... 春の季小い似氣うり古哥あも多う冬小あり實ゆたうとも冬とて可あり... 輜ハ作り易物也あやう農商家毎小是を貯ふさき載るもの小より大小品々あきども作りあう皆同くやうあり名も又あやう只大あるを里俗小修羅と云ふ大石大木をのさるあり... 山くの喬木も春二月のころ小雪小埋りさうか梢の雪ハ稍消て遠目あも見ゆさ此時薪を伐小易けさ農人等あつて輜を捲て山小入る或ハそりを六簾小置もあり常あ見上る高枝も埋りさ雪を天然の足場とて心の休小伐とり大く六把を一人まともさありさて下小三把を並べ中あ二把上あ一把とてを繩あ強く縛一簾小臨が蹉跌小

凍る雪の上あさ幾百文の高も一瞬の間小あゆ小ゆるを輜小のせと引さ或はま山小九曲ある中件のごとく小縛しさ薪の輜小乗り片足をあそりせは是ゆて楫をとり船を走さごうて難所を除く数百文の簾小さる一ツも過さる其術学ぞ一々自然小得る処奇々妙々あり... 輜を引て薪を伐ささひあせさ行とさ二三人の食を草あて編らる袋小のまて輜小らさくことあり山鳥よくとをあてむらぐりささり袋をやがり食を喰尽を樵夫いとをあさ今日生業とことふさたりしや焼飯小せんて打とり見さ一粒ものさ鳥といふ樹上小あり啼人ハむる鳥を睨り言り空肚をかつて輜哥もいさ輜をひきさる事もありとそ人のさりきそりをひくあささささささ是を輜哥とてさあら樵哥あり





唱哥の節も古雅ありものあり親ありひい夫山小へり輶を引てく  
小遠く輶哥をきてて親夫のくをあり輶小遇処まむふいひで親夫  
をバ輶小積る新小踏せく妻や娘くをひきつてくも又輶哥を  
うたうてくをど質朴の古風今目前小存せり是繁花をまきさる幽  
僻の地ありゆあり

春もや景色くつふとひい梅も柳も雪ふらつるも花も緑も  
あつるもくつふとひい二月の空のくつふとひい朝のくつ  
窓のくつ小書讀をりくつ遙小輶哥の聞ふらつるも春めきえうは  
是ハ我のくつ小あつるも雪国の人の人情ぞり

百樹曰我が幼年の頃ハ元日のあつる扇くと市中をうらあ  
りく声あつるひい白酒くの声も春めきく心も朗ありく此声  
今ありく鳥追の声いさくあり武家のつぎく町小遠所あり

江鯨の鮫鯛のまきくつる声今もあり春めくものく三月ハ  
桜草うら声小花をひい五月ハ鯉く小白妙の垣根をまきく  
七夕の竹やくハ心涼く師走の竹やくハ竹ありあり聞小忙物皆  
季小應トて声をきく情小入る事天然の理あり胡茄の悲も又  
然ん件の人の声ありまきくや春の鶯ありひい蛙夏の蟬秋  
の初雅鹿虫の音冬の水鶴をや本編輶哥をまきく春めきえう  
まきくハ真境實事文客の至情あり我是小感どくく小教言  
を置く輶哥の春めくこと江戸人小あつるひいよきうき情あり  
こと小似する事猶諸国小あつる

糞をのまきく輶ありくつるものをまきくや小く作りする物あり二三月の  
ころも地くつる雪ありまきくハく渺くつるも田圃も是下小在りて持  
分の境もまきく小くつるもくつるもあつる小かの糞のそりを引てく小來り



秋夕庵牧之草



見童垂氷を  
輜のそ大持の

つら

輜全図

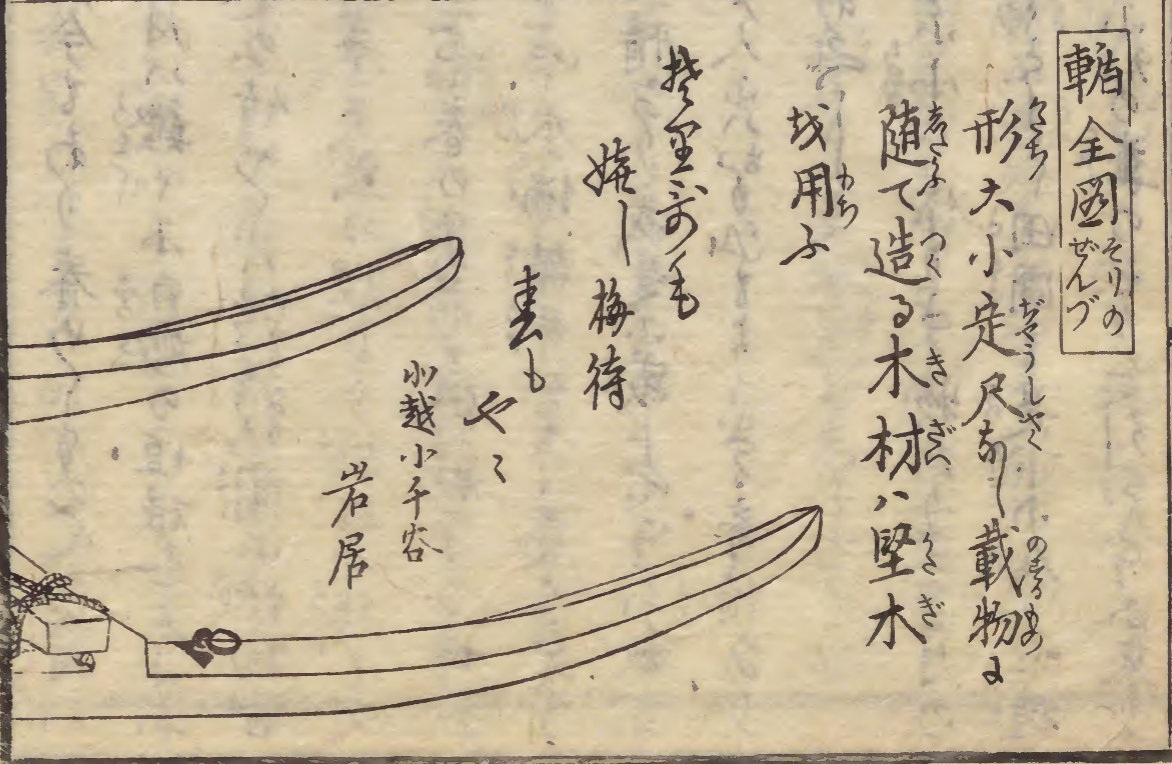
形大小定尺あり載物に  
随て造る木材に堅木  
以用ふ

其重おも

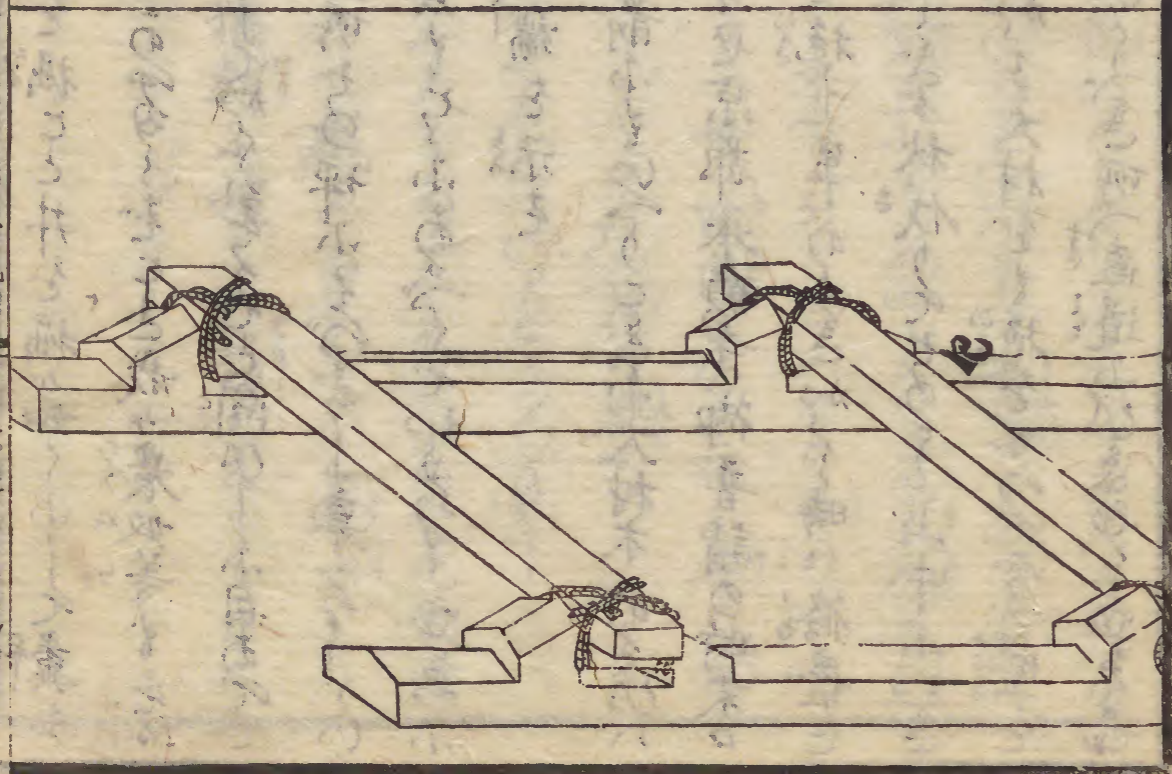
梅待

妻も

水越小千谷  
岩居



学をしく甚不図  
時ハ妻あり





雪のゆるふ一點の目標もなき小雪を掘くと井を掘が如く小く糞を  
入る小我田の坪ふらる事一尺をもわゆること我が農奴等もなる  
事あり説く雪上何を目的めあて小くかくいさる事と問ひ小目あてと  
する事あて心ふらざる事との坪小く事なりとい  
つり所為ハ賤けまごも藝術の極意も小あつてどおつてゆゑ小  
こ小あつて初学の人藝小進の一端を示す  
輻の大なるを里言小修羅といふ事前小いりこと小大材木あつてハ  
大石をのせしひくを大持といふひらせ京都本願寺御普請の時末口  
五尺あつり長さ十丈あつりの楸を拖し事ありさかゝる時ハ修羅を  
二つも三つもかゝるあり材木ハ雪のふらる秋伐りんそのまゝ山中小く  
輻を用ゑる時小いりてひきいひかゝる大材をも拖をりて雪の堅を  
あつて田圃も平一面の雪あつてひきいひ直道直道小ひきいひゆゑ甚

弁あり修羅小大綱をつけ左右小枝綱さへもありまつた小  
本願寺御用木といふ職を二本持つ信心の老若男女童等まごも賤の  
如くあつまりことこをひく木や音頭取五七人花やうる色木綿の衣  
類小彩帛の麾採て材木の上ふあり木やをうらふその哥のツハ  
ツハツハ兎こ兎こ耳みみのみみのみみ胎ふた内うちのうち時とき小こ笹ささのささ葉は  
をのをの大持おほもちがうらんどツハ花の都みやこの都みやこなりだ  
りり百人ひゃくにんのの時とき小こ笹ささのささ葉は  
兎曹うさらら手遊てあそびの輻はらもあり氷柱こほりの六七尺もあるをとり小のせで大持  
の学びをり木やをうらひ引あまて戯とあつるが暖国ぬるくにあり  
あつて聞きせざる事あつて猶輻小種々の話わらわあつてもさの  
るる春寒はるふゆの力ちから



春ふいそバ寒氣地中より氷結あぐるその力礎をあげく椽を  
 反しあひハ踏石をも持あぐる冬ふいそやど寒むるともかき事あり  
 さまじくとも雪も春ハ凍る輔をもつらあると屋根の雪を掘のけつと  
 上ゲちくを里言ハ掘揚といふ前あり往來の路も掘あげありと山  
 をあもめ冬春雪のこりふし雪の山ハ箱根のごとく階を  
 作りて往來のたよりとをさうの所つとふもあやめふ下踏の齒ハ  
 釘をあらハ打て蹉跌さる為とを唐土ゆへ是を標とく山のつらハ  
 まづさる履とを標和訓 カンジキとあり

シガ

冬春ふさぎて雪の氣物ふさぎて霜のおきさるやふある是を里言ハ  
 シガといふ戸障子の隙より雪の氣入りと坐敷ハシガをらす時あり  
 此シガ朝暾の温氣をうらさる処ハ解とあつる春の頃野山の樹木の下

枝ハ雪ふらつともとも揃ハ雪の消るハシガのつきさるハ玉めて作り  
 する枝のやうゆき見事あるものあり川辺あどをうらく者ハ髪うらの毛  
 ふもシガのつく事あり此シガ我ハ塩沢しほふまきありちり郡ちりの中  
 小出嶋こいでありあり多ハ大河ハ近きゆ水氣すゐの霜とあるゆえああん

初夏の雪

○初夏の雪  
 我國の雪里地ハ三月のころふいそバ次第しだいとハ消朝けしあハ凍と鉄石の  
 如くあまとも日中ひちゆうハ上より下よりともあつる月末ふいそバ目めも  
 るやふ昨日今日と雪の丈け低くありゆ雪も降まると雪圃ゆきと  
 りと取のけ家のやとり庭あど雪をも掘まつる小雪凍りと堅きゆえ  
 雪を大鋸おほのこぎりゆと大鋸おほのこぎり。里言ハ大切おほのこぎりといふひきとりとをのその四角ある雪を脊負せハ  
 ありハ擔持おほのこぎりハもるあど暖国の雪ハ大小異り雪ハ枝を折ると杉  
 丸太をとりとをりうらげもさる庭樹あど解とやけハささかハ梅と



雪の中ふ蒼をふくく春待るありと春の末あり此時ふりて去  
 年十月以來暗りし坐敷もやうく明くありと盲人の眼のひくま  
 する心地せしと離れしと桃の節供の名のあやう花はまうや  
 のり四月ふりて田圃の雪も斑ふきえり去年秋の彼岸の時野  
 菜のふ雪の下ふ崩れし梅の盛をせり桃櫻の夏を春とせ雪ふ  
 埋りし泉水を掘りて去年初雪より以來二百日あまり黒闇の水  
 のあふありし金魚鯉もんとりしけふ浮泳も言やせり  
 とりて五月ふりて人も人の手をつけざる日蔭の雪は依然とて山を  
 ぬり況や山林幽谷の雪三伏の暑中も消ざる所あり

○削氷

百樹曰余丁酉の年の晩夏朕見京水を従て北越小遊一時三國  
 嶺を踰る六月十五日ありし小谷の底小堂をまきて

足の小堂を聞く我のまこ谷よりさきより越の山を  
 拙作のまじも實境のまじ記を此嶺より四里山徑隆堀  
 数武も平坦の路を踐む浅貝といふ駒小宿り猶○二居嶺半を越  
 て三侯といふ山駒小宿一芝原嶺を下り湯沢小抵んとする途て  
 遙小一楹の茶店を見り底のものと小床ありと浅き箱やうのものふ  
 白く方ある物を置りて遠目小と石花菜を賣るん口小上  
 ぞとて山をさるる暑をさけ汗もあが小足も  
 つらきとて茶店あるがうく京水とてふもやうのりて腰を  
 うけかの白き物を見まはるとてんふあや雪の氷ありけり六  
 月小氷をさる事江戸の目小最珍けと下りて熟視バ  
 深さ五寸計の箱小氷をさるその中小小踏石との雪の氷を  
 おきり賣る茶箱小問は山蔭の谷小ありめな



きりめんしりふさふさくもひらきば箱菜刀を把盜のあつさく  
 と音しく削りし豆の粉をうけしりせり氷小黄の粉をうけし  
 り江戸の目み見も慣を可笑けき京水と相目しく笑をそのひ  
 つきは價をささきき今もささきき豆の粉をうけしりささきき  
 掛小用意しり砂糖をうけしり削氷小齒もささきき暑を  
 ささきき珍しき事しりささきき  
 そもくこのけがり氷との物を珍味とする事古書小散見せ  
 その中小定家卿の明月記小曰「元久二年七月廿八日途より和  
 哥所小参る家隆朝臣唐櫃二合を取寄らる。破子。凡。土器  
 酒等あり又寒氷あり自刀を取り氷を削る奥小入る事甚し」  
 本書ハ件ハの元久二年乙丑より今天保十一年まで凡六百二十余年を  
 漢文に歴て古人の如く削氷を越後の山村小賞味しりる事珍とささきき

奇とささきき實小好古の肝を清くせ

○按ふいと氷の本訓ありと訓ハ寒凝の義ありと士清翁が和

訓葉小しり氷室といふ事俳諧の季寄といふものゝどあもささきき

とささきき普人の知りたる事ゆき周禮もささきき唐土のむしりか

ありしことあり 御国ハ仁徳紀小見をささきき古きをささきき

ア延喜式小山城国葛城郡小氷室五ヶ所をいざせり六月朔日

氷室より氷をいざしり朝廷小貢献するを諸臣も領賜事

年毎の例ありしりあり前小引り明月記の寒氷ハ朝廷より

の古例の賜ふありしりいんといふは削氷を賞味せしりし

七月廿八日あり六月朔日小なりしり氷七月廿八日を消さるあり

へき明月記ハ千字百卷の書ありしり七六の語とて氷室を

出し六月の氷朝を待たしり蓋貢献の後氷室守ケ私小出をも





六月 賣雪圖









鳥の人ハ松鳥の月とまゝおまどらうらまでも飽る物ハ孝心  
ある我子の顔と藏置黄金の光あるべし

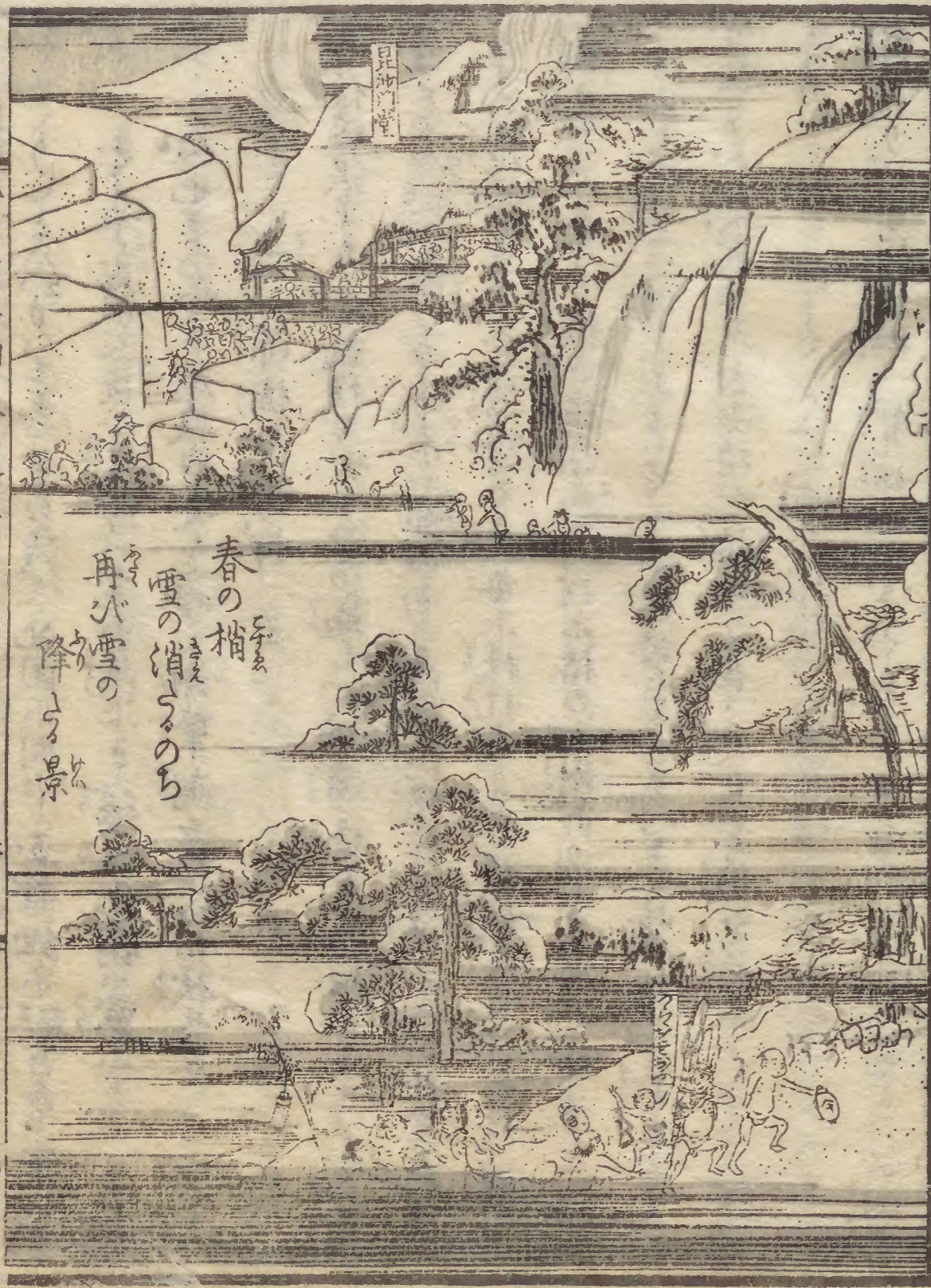
○雪の多少

越後国南ハ上州小隣<sup>上州</sup>魚沼郡<sup>魚沼郡</sup>あり東ハ奥州羽州<sup>奥州羽州</sup>隣<sup>隣</sup>蒲原郡<sup>蒲原郡</sup>岩船  
郡<sup>岩船郡</sup>あり国境ハ<sup>国境</sup>づも連山<sup>連山</sup>波濤<sup>波濤</sup>をあるまゝ雪多<sup>雪多</sup>東北ハ鼠<sup>鼠</sup>蘭<sup>蘭</sup>  
出羽<sup>出羽</sup>の西ハ市振<sup>市振</sup>越中<sup>越中</sup>の場<sup>場</sup>小至<sup>小至</sup>の道八十里<sup>八十里</sup>間都<sup>都</sup>北<sup>北</sup>の海濱<sup>海濱</sup>あり海気<sup>海気</sup>小上  
りて雪一丈<sup>一丈</sup>ふい<sup>ふい</sup>て<sup>て</sup>多<sup>多</sup>少<sup>少</sup>あり又消<sup>消</sup>も早<sup>早</sup>頸城<sup>頸城</sup>郡<sup>郡</sup>の高田<sup>高田</sup>ハ海<sup>海</sup>を去<sup>去</sup>事  
遠<sup>遠</sup>く<sup>く</sup>も雪深<sup>雪深</sup>文化<sup>文化</sup>の<sup>の</sup>より大<sup>大</sup>雪<sup>雪</sup>の時高田<sup>高田</sup>の市中<sup>市中</sup>雪<sup>雪</sup>小  
埋<sup>埋</sup>り<sup>り</sup>闇<sup>闇</sup>夜<sup>夜</sup>のごと<sup>と</sup>昼<sup>昼</sup>夜<sup>夜</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>事</sup>十<sup>十</sup>余<sup>余</sup>日<sup>日</sup>市中<sup>市中</sup>燈<sup>燈</sup>の油<sup>油</sup>尽<sup>尽</sup>て諸<sup>諸</sup>人<sup>人</sup>難<sup>難</sup>  
免<sup>免</sup>せ<sup>せ</sup>小<sup>小</sup>御<sup>御</sup>領<sup>領</sup>主<sup>主</sup>より家<sup>家</sup>毎<sup>毎</sup>小<sup>小</sup>油<sup>油</sup>を賜<sup>賜</sup>ひ<sup>ひ</sup>事<sup>事</sup>あり<sup>あり</sup>此<sup>此</sup>時<sup>時</sup>我<sup>我</sup>塩<sup>塩</sup>沢<sup>沢</sup>も大<sup>大</sup>  
雪<sup>雪</sup>ふ<sup>ふ</sup>て夜<sup>夜</sup>昼<sup>昼</sup>を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>家<sup>家</sup>雪<sup>雪</sup>ふ<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>づ<sup>づ</sup>まり<sup>まり</sup>日光<sup>日光</sup>を<sup>を</sup>見<sup>見</sup>る<sup>る</sup>事<sup>事</sup>十<sup>十</sup>四<sup>四</sup>五<sup>五</sup>日<sup>日</sup>連<sup>連</sup>日<sup>日</sup>  
あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>雪<sup>雪</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>人<sup>人</sup>気<sup>気</sup>鬱<sup>鬱</sup>悶<sup>悶</sup>と<sup>と</sup>病<sup>病</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>い<sup>い</sup>る<sup>る</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>け<sup>り</sup>

百樹曰余牧之老人が此書の稿本小就て増修の説を添上梓の  
為小傭書授一本を作をりて老人が寄る書中小

當年ハ雪遅く冬至小成ても駅中の雪一尺小くても此日次めて  
今年ハ小雪ありんと諸人一統悦び居り所小廿四日<sup>十月</sup>黄昏<sup>黄昏</sup>より  
降<sup>降</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>廿<sup>廿</sup>五<sup>五</sup>六<sup>六</sup>七<sup>七</sup>八<sup>八</sup>九<sup>九</sup>日<sup>日</sup>まで五日の間<sup>五日の間</sup>昼<sup>昼</sup>夜<sup>夜</sup>小<sup>小</sup>つ<sup>つ</sup>る<sup>る</sup>事<sup>事</sup>を<sup>を</sup>一<sup>一</sup>丈<sup>丈</sup>  
四<sup>四</sup>五<sup>五</sup>尺<sup>尺</sup>小<sup>小</sup>も<sup>も</sup>む<sup>む</sup>び<sup>び</sup>申<sup>申</sup>い<sup>い</sup>毎<sup>毎</sup>年<sup>年</sup>の<sup>の</sup>事<sup>事</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>不<sup>不</sup>意<sup>意</sup>の大<sup>大</sup>雪<sup>雪</sup>小<sup>小</sup>く<sup>く</sup>廿<sup>廿</sup>七<sup>七</sup>日<sup>日</sup>  
より廿九日<sup>廿九日</sup>まで<sup>まで</sup>駅<sup>駅</sup>中<sup>中</sup>家<sup>家</sup>毎<sup>毎</sup>の<sup>の</sup>雪<sup>雪</sup>掘<sup>掘</sup>小<sup>小</sup>く<sup>く</sup>混<sup>混</sup>雑<sup>雑</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>簷<sup>簷</sup>外<sup>外</sup>急<sup>急</sup>玉<sup>玉</sup>  
山<sup>山</sup>を<sup>を</sup>築<sup>築</sup>戸<sup>戸</sup>外<sup>外</sup>より<sup>より</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>懼<sup>懼</sup>り<sup>り</sup>申<sup>申</sup>い<sup>い</sup>今日<sup>今日</sup>も<sup>も</sup>又<sup>又</sup>大<sup>大</sup>雪<sup>雪</sup>吹<sup>吹</sup>小<sup>小</sup>相<sup>相</sup>成<sup>成</sup>家<sup>家</sup>内<sup>内</sup>  
暗<sup>暗</sup>く<sup>く</sup>蠟<sup>蠟</sup>燭<sup>燭</sup>小<sup>小</sup>く<sup>く</sup>此<sup>此</sup>状<sup>状</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>申<sup>申</sup>い<sup>い</sup>何<sup>何</sup>程<sup>程</sup>可<sup>可</sup>降<sup>降</sup>哉<sup>哉</sup>難<sup>難</sup>計<sup>計</sup>一<sup>一</sup>同<sup>同</sup>心<sup>心</sup>  
痛<sup>痛</sup>い<sup>い</sup>て<sup>て</sup>居<sup>居</sup>申<sup>申</sup>い<sup>い</sup>下<sup>下</sup>畧<sup>畧</sup>是<sup>是</sup>當<sup>當</sup>年<sup>年</sup>天<sup>天</sup>保<sup>保</sup>十<sup>十</sup>一<sup>一</sup>月<sup>月</sup>廿<sup>廿</sup>九<sup>九</sup>日<sup>日</sup>出<sup>出</sup>の<sup>の</sup>尺<sup>尺</sup>翰<sup>翰</sup>あり  
此文<sup>此文</sup>を<sup>を</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>も<sup>も</sup>越<sup>越</sup>後<sup>後</sup>の<sup>の</sup>雪<sup>雪</sup>を<sup>を</sup>知<sup>知</sup>る<sup>る</sup>べ<sup>べ</sup>し<sup>し</sup>余<sup>余</sup>越<sup>越</sup>後<sup>後</sup>の<sup>の</sup>夏<sup>夏</sup>小<sup>小</sup>遇<sup>遇</sup>小<sup>小</sup>五<sup>五</sup>  
穀<sup>穀</sup>蔬<sup>蔬</sup>果<sup>果</sup>の<sup>の</sup>生<sup>生</sup>育<sup>育</sup>少<sup>少</sup>く<sup>く</sup>も<sup>も</sup>雪<sup>雪</sup>を<sup>を</sup>畏<sup>畏</sup>る<sup>る</sup>色<sup>色</sup>あり<sup>あり</sup>山<sup>山</sup>景<sup>景</sup>野<sup>野</sup>色<sup>色</sup>も<sup>も</sup>雪<sup>雪</sup>あり





春の楢ハルノノ  
 雪の消ユキノキるのち  
 再び雪の  
 降フる景カミ

佐浦詣堂押圖サウラマシドウオシヅ





りしとふおのりまを雪の浅き他国小同ト五雜紐五雜紐小部百草雪を畏  
むく霜を畏る蓋雪ハ雲小生ト陽位也霜ハ露小生ト陰  
位也とのり越後の夏を視て謝肇淪謝肇淪カ此説小伏せり

○浦佐の堂押

我住塩沢より下越後の方二宿越六日町浦佐との宿ありる小普光  
寺との真言あり寺中小七間四面の毘沙門堂あり傳り此堂大同二  
年の造堂ありとを修復の度毎小棟札あり今猶歴然と存毘沙門の  
御丈三尺五六寸往古椿沢といふ村小椿の大樹ありを伐て尊像を作り  
一とを作名ハ傳らざとて木材椿をのり此地椿を薪とまと  
うろくと崇ありゆゑ小椿を植む又尊鳥を捕を忌玉ふゆゑ小諸鳥  
寺内小群をあり人を怖む此地の人鳥を捕ありハ喰ハ立所小神  
罰ありたとい遠郷ハ聳娘小ゆ年を歴ても鳥を喰ま必凶應

あり冥驗の照くる事此一を以て知る遠郷近邑信仰の  
人多くしより此毘沙門堂於て毎年正月三日の夜限り  
堂押との事あり敢祭式の礼格とをあ福むより有来  
たる神事あり正月三日ハより雪道あり十里廿里より来りて  
此浦佐一宿此堂押小遇人もあ近村ハあり  
○さて押小来りし男女普光寺小入り衣服を脱了身持物も  
も置棄婦人ハ浴衣小細帯もあ男ハ皆裸あり  
燈火を点ころの七間四面の堂小ゆ裸の男女推入り錐をた  
つの地余も若かりしころ一度此堂押あ上あ手  
を下さ事ありや逼り立けり押との誰もサン  
ヨウ大音呼声の下小堂内小充滿老若男女サイ  
コウサイと南と東と



かゝるを此一かゝる男女俱小元結おのづから髪を乱れ  
 甚奇あり七間四面の堂の内小裸ある人とのあひあひする手もあつて  
 事ありぬやどるまふ人の多きとありあつて此諸人の氣息正月三日の  
 寒氣ゆゑ烟のごとく霧のごとく照せる神燈もことごとく為小暗く人の  
 氣息屋根うゝ小露とあり雨のごとく小降人氣破風よりりりて雲  
 の立のりやが如く婦人稀小兒を背中小むをびつげく押し有ども  
 小の小兒啼あつたれも常とあるの不思議あり況此堂押小いさうも  
 怪敷をうける者むり一人あり婦人のあつた湯具をうり  
 ありもあつて闇処小噪雜一人もひとりかゝる事をもせすこと  
 あり思沙門天の神罰を怖るゆゑあり裸を祈以人氣少く堂内  
 の熱とること燃ごごごありゆゑ願望小よりて六里二里の所より正  
 月三日の雪中寒氣肌を射ごごごをも厭む柱のごとき氷柱を裸身小

脊負て堂押小きつるもあり二かゝる三かゝる小いさうぶらうある人も  
 熱と暑中のごときゆゑ堂のやう小ある大なる石の盥盤小入りて水を  
 浴び又押小入るもあり一ト押おつた息をすむ七押七踊あつて止を定す  
 踊といふも桶の中小半を洗ふがごとくゆゑ小人といふ満身小汗をあらがひ  
 第七をどり目小いさう普光寺の山長耕夫の長をい手小筋を持人の手輦小乘  
 て人のまゝかゝり大音小い思沙門さぬの御前小黒雲が降とモウ  
 衆人「あんどとさうさうの」モウ「山男」米がらとさうさうの」モウとさらををり  
 ろうひ此さら内摺ハ凶作ありと外へとをりあつた又志願の者兼て  
 普光寺へ違へもきて小桶小神酒を入と盃を添て献て山男挑燈をりたせ  
 人をむりつる者サ人をむりささふとさうと堂小入る此盃手小入ると幸  
 ありとさう人の傳をりて取んとと神酒ハ神小供する状と人小  
 散一盃六人の中へ擲ることを得る人の宮を造りて祭る其家あつた



おもむきの幸福あり此てちんをも争ひ奪ふるも破るその骨一  
 本よりとも田の水口さしけこの水のかる田ハ熟實虫のつく事あり  
 神冥のあつさる事あり神く人の知る所あり神事をさる人々離散  
 一と普光寺小入り初葉置る衣類懐中物を視る小鼻帯一枚ご小失  
 る事あり掠る即座小神罰あるもあつり。さて堂内人散り後々の  
 山長堂内小葺幹をちりじり度例あり翌朝山長神酒供物を備ふ後  
 さぬ小進捧ぐ正面小をむを神の忌めふと昨夜ちりりさる葺幹す新  
 小折あり是人散るのち諸神と小集り踊玉ふあをさるを踏をり  
 五ふりといひつゝ神事ふさる見戯小似ること多しさるも凡慮  
 を以て量識づるは此堂押小類せし事他國ありあつて姑記し類  
 を示す

北越雪譜二編卷之一 終



